

第 27 回 研究大会 報告

特別講演

「東京 2020 オリンピックの振り返りと パリオリンピックに向けて」

＜ 矢島 久徳 氏 ＞

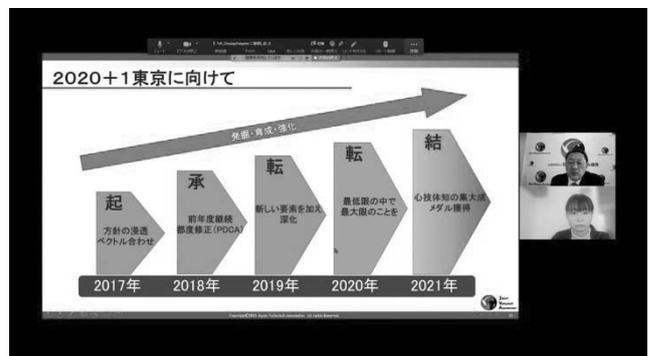
女子の中田監督体制の主要大会の結果です。2017 年から 2021 年まで、オリンピック、世界選手権、ワールドカップ、グラチャン（中止）、ワールドグランプリ、ネーションズリーグ、アジア大会、アジア選手権という形で成績が出ています。女子は、上位に進出していましたが、オリンピックでは故障者など外部要因もあり予選敗退という形で終わりました。FIVB 世界ランキングで日本は 9 位。アジアの主要な国で、中国が 3 位、韓国が 14 位、タイが 19 位ということで推移しています。これからオリンピック予選が最終的にどうなるかは決定されていませんが、ランキングで決まる可能性が高いです。2024 年のオリンピックが決まるまでは日本は 10 位以内をキープするようにはしなければならないということです。女子の世界ランキングの推移です。中田監督時代で 2017 年の 6 位からだんだん下がって 9 位になりました。次のパリ大会でいかに上位に行くかがポイントになってきます。

男子は最終的に第 7 位で 29 年ぶりの入賞でオリンピックを終了しております。世界選手権については、2018 年は 17 位でした。当時、男子強化委員長として試合に帯同し細かいことも見てきたのですが、大会三日前くらいにオポジットの西田選手が捻挫をしたり、ミドルの李選手の骨折があったりして、大会の直前に主要戦力が離脱しなければならないという中、17 位という結果に終わってしまいました。皆さんからも非常に厳しいご意見をいただき、監督も続けるのか続けないのかなど、世界選手権後にはいろいろなことがありました。中垣内監督の継続が正式に皆さんに承認いただき、順々と結果がついてきました。それが力になって、ワールドカップ 4 位、ネーションズリーグでは順位自体は変化がなくとも内容として良くなり、右肩上がりのチーム力が構築されたのではないかと考えています。現在の FIVB の世界ランキングで日本は 11 位ですが、アジアの最大のライバルであるイランが一つ上にいます。なんとかオリンピックが始まるまでにその上に位置したい、それが大きな課題目標になっています。その他のアジアの国に関しては、20 位にカタール、22 位に中国、29 位にチャイニーズ・台北がランキングしています。残念ながら韓国はもう少し下のところでやっていますが、このような状況でランキングは推移しています。中垣内監督体制で、世界ランキ

ングは 19 位から始まり、着々と一つずつ順位を上げていき、オリンピック終了時は 10 位でしたが、最後のアジア選手権でイランに敗れ 11 位になりました。これから 2024 年に向けて右肩上がりに推移していかなければならないということです。

ランキングについて、システムが変わりました。1 試合ごとにポイントが変わるというシビアなシステムになっています。これからは 1 試合の重みが今までよりも違うということです。上位国に勝てばジャイアントキリングですが、日本のランキング以下のチームに負けるとランキングが下がっていくというシステムなので、1 試合 1 試合が大切であることを理解して頂けたらと思います。

2018 年から 2021 年の強化サイクルです。シニアとアンダー同時並行で進めてきました。2020 東京対策プロジェクトと題して進めて来ました。アンダーも継続して発掘・育成・強化を進めてきたという絵でございます。また、2017 年から 4 年スパンで 2020 年まで起承転結ということで進めて来ました。コロナの影響で 2021 年にオリンピックが延びたため、起承転結ということでこのような絵になっております。当初、男女とも初年度は方針の浸透とベクトル合わせをして、2 年目は継承をしながらその都度修正を行っていく PDCA サイクルを回していました。その後、3 年目は新しい要素を加えながら深化させ、コロナ禍では限られた合宿期間、練習時間の中でいかに最大限のことをしていくかということをテーマに強化を推進して参りました。最後メダル獲得にはなりませんでしたが、結ということでやってきた 4、5 年間の成果を出していこうとしました。



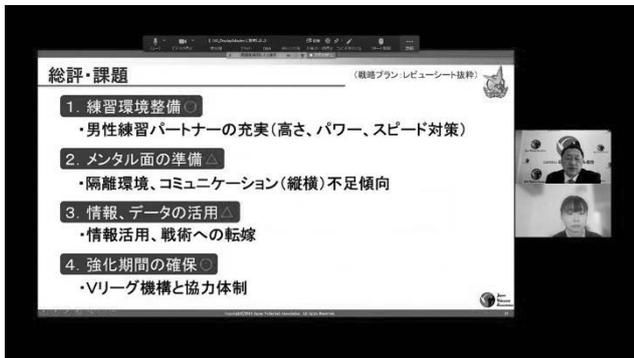
続きまして女子の強化方針、中田監督の 2017 年からの取り組みを紹介したいと思います。これは大会報告書の中からポイントを抜粋して皆さんにお示ししております。重点強化策・強化方針ということで 2017 年度からこのような形

でやって参りました。一つ目は2017年から2018年までチームの方向性や戦術の落とし込みをしていきました。ここで、外国人コーチ招聘により異なる視点から見ていくということで、アクバッシュコーチを海外から招聘しました。2年間という短い期間でしたが、チームに刺激を与えました。二つ目は、中田監督が目指したものとして、テンポの良いコンビバレーです。得点源になる絶対的エースの不在により、全員でのテンポの良いコンビバレーを進めていくということで強化をしてきました。三つ目は、正確で崩れないレセプションアタックです。これは海外の上位国に強烈なサーバーがいるので、1回で切ることができるレセプション能力や、多少崩されてもそれを決めることができるスパイク力を強化してきました。四つ目はトータルディフェンスの強化ということで、ブロックなど守備の部分の強化を2017年から2021年大会まで継続してきました。五つ目は、攻撃のバリエーション増ということで、故障から復帰の長岡選手を起用して、攻撃の幅やバリエーションを増やそうとしました。しかし、長岡選手の怪我が重なり、使うことができませんでした。これは中田監督が本来やりたかったことでありました。六つ目は、若手有望選手の戦力化であり、オリンピックにも出場した石川真由選手などが挙げられます。U20世界選手権で初優勝したことは名誉なことでありました。まずは石川選手を投入したことなど中長期的な選手育成を図ろうとしました。セッターの榎井選手やミドルの選手など若手を早期に戦力化して、オリンピックを全力で戦いながら次に見据えてチーム編成をしたということです。続いて、具体的な技術のポイントです。世界とのギャップを生み出すために、常識にとらわれず日本オリジナルのワンフレームバレーを完成するという事です。レセプションからもトランジションからもほぼ同じスピードで攻撃を仕掛けるためのレシーブ力・スピード・連携をしていくこと。また、継続強化しているレセプションアタック・サイドアウトなどの更なる強化です。レセプションの安定に加え、コート幅をいっぱいに使った攻撃や高いトスを打ち切る力、引き出しやリバウンドなどネット際のボール処理の引き出しを増やすことなどがあります。最後に、組織的ディフェンスからセッターの選択肢を減らさないトランジション攻撃・ブレイク力の向上であります。そのために、バリエーション豊富で工夫のあるサーブを打つこと、相手ライト攻撃に対する守備、世界トップレベルの長めの強打に対するディグ、前衛レフトの内ナーレシーブの判断と、ワンタッチボールに反応できるポジショニングの追求、相手スパイクコースに応じた両サイドブロッカーの位置取り。こういった中田監督体制の多岐に渡った強化策を取りながらチームを作っていたところなんです。続いて、総評・課題について女子のものをお示したいと思います。これも大会報告書の抜粋から具体的なトピックスを盛り込みました。5つありますが、一つ目は試合を

左右する大事な場面での得点力不足ということがありました。皆さんも韓国戦が思い浮かぶと思います。最後あのような形で勝ち切ることができなかった訳ですが、誰か決め切人がいたらと思いながらこの項目を書いたのではないかと考えております。二つ目は、中田監督が大きく文字を割いて書いていたところですが、世界で戦える大型セッターを固定できなかったことです。中田監督自身が名セッターだったので、セッターに求めることが多かったと推測します。2017年から8名のセッターを選出して、いろいろな経験を積ませたうえで、悩まれ考えられて最後は榎井選手に決まりました。しかし、この部分は中田監督の残念だったというところでコメントされたのだと思います。三つ目として試合の中での古賀選手の負傷ということで、主要大会での主力選手の負傷はチームにとって痛手です。男子でも、西田選手が捻挫で初戦に出られなかったり、ミドルの選手が怪我をしたりということがありました。日頃からカバーできる選手を強化していますが、主力選手が抜けるということは精神的なところでの影響を与え、歯車が崩れていくということでもあります。このことは中田監督にとって大きな要因だったと述べております。四つ目として、中心選手の引退、怪我です。主力としてディフェンス面で優れた力を発揮した新鍋選手やセッターの佐藤美弥選手の怪我に続く引退など、想定外の出来事がオリンピックの延長で起きたことは、計算が狂った原因であったと思います。五つ目として、若手選手の経験です。中田監督が若い選手を使えたということは次のパリオリンピックでのメダル獲得に向けて良かった部分であります。しかし、これは私の推測ですが、榎井選手などが世界で戦う経験が少なかったということは、直接ではないですが勝ち切れなかった原因であるということで、良い面も悪い面もあったのではないかと考えております。

もう一つ戦力プランとしてJSCが出すプランの総合検証というものの項目です。女子について、練習環境の整備ができたということで、男性練習パートナーの充実があります。男子のVリーグの選手を招聘して、高さ・パワー・スピードの対策を早いうちからできたことが非常に良かったと述べております。二つ目に、メンタル面の準備です。男子もそうでしたが、ネーションズリーグを終えての2週間の隔離はストレスのかかる状況でした。女性特有のメンタルも関係すると思いますが、メンタル面を良い方向に向けるという部分で悩ましい所がありました。あとは縦横でのコミュニケーションが不足していたことです。三つ目、情報データの活用ということで情報を戦術へ転嫁できなかったということです。新村さんもデータを提供する中で結果を出せず、謙虚な姿勢で△と評価をされた次第です。最後に四つ目、強化期間の確保は、女子に関してVリーグを早めに終わらせて代表選手を招集し、練習をすることができたこと。加えて男子選手を招聘して練習できたことは良か

ったことであります。これらが中田監督体制の強化方針とオリンピック後・これからの総評や課題になります。



ここで、縦横のコミュニケーション不足傾向ということで、一つデータを示します。中田監督以下の女子強化スタッフです。体調の関係で強化委員長が3人になったり、コーチが流動的になったりしました。中田監督が強化委員長と話した上での最良の判断での結果だったと思います。比較して、男子は、中垣内監督以下のコーチ陣が不動のメンバーで行けたということで大きな違いがあります。私がこのメンバーでやってきて感じたことは、コミュニケーションが良くなってきて、お互いの仕事ぶりも分かって意思の疎通がスムーズになってくること。しかし、4年間同じ仕事をしているといい加減になってくるところもあるということです。アジア選手権で中垣内体制が一旦終わったことではある意味良いタイミングで次に引き継いだということではないかと考えております。体制についての良い悪いはありませんが、この違いが女子チームでのコミュニケーション不足の評価の一つの要因だったのではないかと思います。

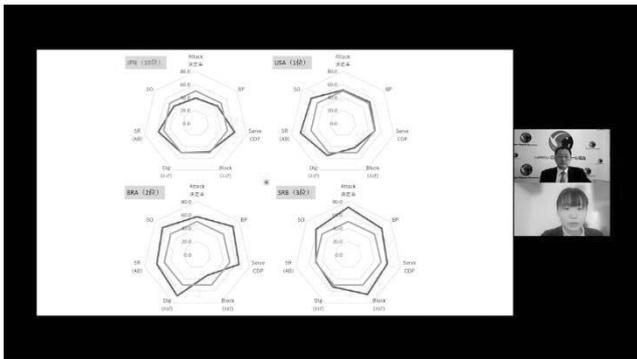
< 新村 薫 氏 >

オリンピックのデータの中から見たいと思います。チームの公式データと FIVB を載せているデータを元にやっているもので、今から紹介するのは私が作成したテクニカルレポートからすべて抜粋しております。こちらが各国の年齢に関するグラフで、左からアメリカ、ブラジル、セルビアのように順位ごとに並んでおります。日本が10位でしたので、右から3番目という形になっております。年齢的には30歳前くらいの方々が構成されておりました。気になる特徴的なものとしては、順位別にグループ分けをしたときに上位のチームになるにつれて、年齢値が高かったという傾向についてです。右のグラフのスターティングラインラップの7名に関して言うと、上位1位から4位のチームに関しては、中央値としても30歳を超えている方になっています。やはり、どのオリンピックもそうですが、最終的に4年目の集大成となる経験豊富なチームを作ろうと臨んでいたのかなと思います。

続きまして、身長に関するグラフです。日本が右から3番目で、日本は常日頃から小さいチームと言われている中で最低身長のチームであったというグラフになっております。これがポジション別に身長を出したもので上からランキング順になっていて、セッター・アウトサイドヒッター・オポジット・ミドルブロッカー・リベロという中で、どのポジションもチーム平均で言えばリベロを除いて180センチを超えてきている中で、日本はセッターとアウトサイドヒッターが170センチ台、となっております。特にアウトサイドヒッター・オポジットの身長差が上位国と比べて非常に差が出てきていると思います。どちらに関してもスパイクを打つ時には大きいブロッカーがいるとか、ブロックをする際には自分よりも10センチくらい背の高いスパイカーが打ってくるというような形になっておりました。

続きまして、数値的にデータを見ていこうと思います。各国特徴的に分かるようにしようということで、偏差値チャートを作りました。7つ項目をあげまして7角形で表しており、例としてアメリカの数値を出しております。上位10チームの各数値を平均で50とし、それに対してアメリカがどのような偏差値だったかを赤い線で表しております。上からアタック決定率、時計回りにブレイク率・サーブ効果率・ブロックスコア・ディグのスコア。これは、それぞれの評価を点数付けて10点中何点かの評価を算出したものになります。サーブレシーブのABパス率・コンビがどれだけ作れたかという指標となります。そしてサイドアウト率、というような形です。アメリカに関しては、サーブレシーブのABパスが非常に崩れなかった、という赤い図の現れ方になっております。日本もこういったものを目指そうとしていたグラフなのかなと思います。左上が日本の数値になっております。右上がアメリカ・ブラジル・セルビアとなっております。日本は他の3チームより赤い印が小さくなっております。特にアタック決定率が偏差値で言うと30前後になっていて非常に低く、それに伴うサイドアウト率・ブレイク率が低くなってしまいました。しかし、サーブレシーブやサーブ、一本目の精度というのはチームとしても強化していこうということだったので、ノンスコアリングスキルのような形になりますが、そこは数字として高かった、ただしアタックの決定でなかなか得点に結びつかなかったというグラフになっております。アメリカは非常に高いサイドアウト能力があった。ブラジルはブロックスコアで非常に低く凹んでいますが、その他は非常に素晴らしい数値を残しております。特にサーブレシーブやサーブの崩し、ディグスコア、一本目を落とさないとか、そういったことからブレイク率、サイドアウト率というところに繋がっていったと思います。特にラリー中のバックアタックの使用等がブラジルは2021年のネーションズリーグから非常に強化していてコンビネーションとして確立されていたのが非常に良かったのかなと感じております。セル

ビアは、アタック決定率が高い、偏差値で言うと70を超えるほどのアタック決定率を誇っておりました。サーブレシーブで崩されてもアタックで決める、ディグで崩されてもアタックで決める、のような形でサイドアウトやブレイクで得点を取っていた、という形になります。セルビアはブロックの数値も高かったです。質もよい高いブロックからのアタックで得点を取っておりました。



続きまして、1セット当たりの得点の内訳になります。上から優勝したアメリカ、準優勝のブラジルとなっていて、日本が一番下となっております。それぞれセットでこのアタック・ブロック・サーブ・相手ミスは何点取っていたかという内訳になります。日本はアタック得点が14~15近くあるチームに匹敵するほどのアタック得点はしていた、という数値になっておりますが、ブロックの決定本数が非常に少なかったのかなと感じております。これが上位国のように2点3点であれば、23点取れたのでこの差も非常に大きかったのかなという風を感じております。ただブロックは身長が低いということもありますので、そこをどうやって補っていくか、アタック得点で増やしていくのか、サーブ得点を増やして得点をあげていくのか、というところが課題となるかと思えます。23点以上取っているチームの特徴としてアタック得点が14点以上あります。ブロック得点が3点前後、サーブ得点は1.1~1.6、ここをどうやって日本がそれぞれのシーズンの目標やチーム状況によって何のスキルで取っていくのかということが重要になってくると感じました。こちらが得点内訳になるのですが、逆に失点の内訳はどうなるのか、というところで出したものになります。アタックの失点で日本は2.4点と非常に多かったこととなります。被ブロックは3.2点、合計で5.6点分が失点になっている、という形になっております。逆にサーブのミスやサーブレシーブのミスは非常に少なかったところになります。もう1点として、相手のアタックの決定、ここも減らしていけたらよかったなというところなんです。上位に行きますと12点前後になっております。ここをしっかりと拾って行って、切り替えてアタックを決めに行く。もしくはトランジションに持ち込まないようにしっかりレセプションアタックを日本が切っていく、というような形

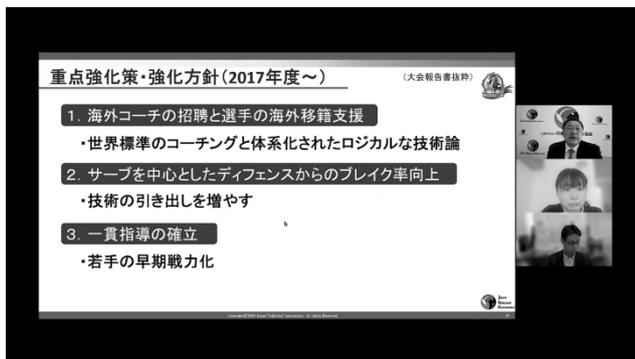
でこの相手のアタック決定を減らしていく必要がある、と共にアタックの失点を減らしていかないといけないというグラフになっております。イタリアは相手のアタックは防いでいましたが、アタックのミスやサーブのミスというような自滅の形が多かった、というような各国特徴が出ております。リオ五輪から東京五輪に向けて強化を図ってこうということで、1つ強化していたものの中でレセプションアタックがあります。これがリオの時の数字でトータルの決定率と効果率です。一番良いサーブレシーブの時の決定率と効果率。このようにリオの時は満遍なくどのサーブレシーブの時も40%前後決めていて、効果率も30%前後ある、非常にいいように見えるのですが、これを各国全部出して並べた時に、左下がAパスの時、真ん中がBパス、右がCパスなのですが、このAパスの時これがリオの時は最下位でした。アメリカに関しては60.9%決めていたのですが、日本は40.3%。ここは良い状態であるのでコンビでしっかりと切っていく必要がある、ということで日本チームとしてはこの数値をあげていこうと5年間を過ごしてまいりました。結果的に言いますと、リオの時と東京の時を比べると決定率が8.5%上がっていて、効果率自体も10%も上がっているという数値になっております。予選突破ができなかったのですが、やってきたものの1つとしてコンビネーション、セッターが変わっていてもどの年も比較的このAパス時の決定率は高くなったので、引き続きパリでもコンビの精度を上げ、どうやってアタックの失点、非ブロックを減らしていくのが日本の課題だと感じております。

< 矢島 久徳 氏 >

続きまして、男子の強化方針・取り組みに移ります。強化方針ということで中垣内監督が監督になる前後に、このようなことをやっていきたいといったものです。伝統の継承ということで、代表としての高い自覚をもつこと、規律遵守、妥協のない練習をすることです。また、チーム内コミュニケーションの充実として、双方向での対話を行っていくということなんです。さらに、人間力の強化で、JOCの基本方針として「人間力なくして競技力なし」という言葉がありますが、これをやっていきたいということでもあります。他にも、明確な目標設定とその共有をすること、JVA各本部との協業をしていくこと、代表選手の海外派遣の検討ということなんです。海外派遣に関しては、石川選手はじめ、西田選手、当時は古賀選手、また高橋藍選手などが海外に行きましたが、そのようなことを積極的にやっていけたら良いということでした。最後にアンダー・カテゴリーとの協業です。アンダーからシニアまで一貫して指導をしていくということをございます。次に強化目標として、2020東京オリンピックでのメダル獲得などを目標に掲げながらやってきました。チーム強化策としましては、サイドアウト力向上、ブレイク率向上、厳しい練習・長期トーナメントに

負けない身体作り、メンタルトレーニングの導入、各カテゴリーでの技術指導項目の同調、Vリーグ・選手所属チームとの協業という6つの項目を様々なところに示しながら行ってきました。メンタルトレーニングについては、具体的にメンタルトレーナーを招くことなどはできませんでした。しかしながら、フィリップ・ブランコーチを招聘して、彼自身の経験や色々なことを話してもらうことで選手のメンタルトレーニングになったのではないかと思います。また、これはスローガンとして中垣内監督が作ったものです。1年目は「ONE POINT AT A TIME」、直訳すると「ここで1点」ということでありますが、残念ながらあまり浸透しなかったというのが現状です。2018年から2021年まで「NO LIMIT」、限界なく色々なことをやっていくということで、2018年は「～挑戦～」をスローガンに作成しました。代表である自覚を持つことや、固定観念・先入観を除去して取り組むということの思い入れとしてこのような言葉を作っていました。2019年は「～Ready To Rise そして、東京へ～」です。2020・21年は「～Let's Do This!～」ということで、現体制での集大成としてオリンピックで蓄積してきた力を完全燃焼しようとやって参りました。

重点強化策・強化方針につきましては大会報告書の抜粋であります。一つ目に、海外コーチの招聘と選手の海外移籍支援ということで、フィリップ・ブラン氏、アンダーカテゴリーでゴードン・メイフォース氏を招聘しました。これにより、世界標準のコーチングと体系化されたロジカルな技術論を取り入れていこうということでした。二つ目に、サーブを中心としたディフェンスからのブレイク率向上です。技術の引き出しを増やすということで、スパイクに関しては、プッシュ、リバウンド、ブロックアウトなどが挙げられます。三つ目に、一貫指導の確立ということで、若手の早期戦力化を図るということを述べております。



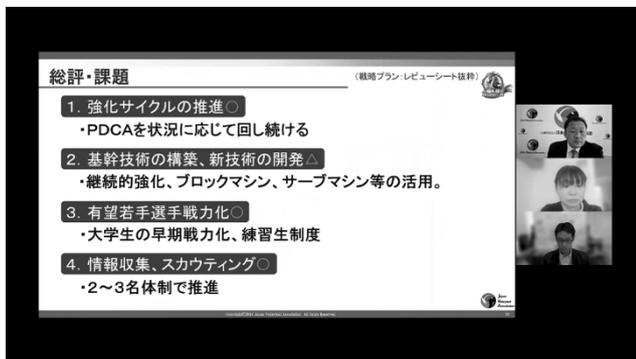
このスライドは、現在監督のフェリッパ・ブラン氏、アンダーカテゴリーを見ておられましたゴードン・メイフォース氏です。このような形で二人を招聘して新しいバレー理論をお話し、強化してもらいました。ブラン氏を招聘した時のお話があります。ブラン氏は優れたコーチで、2017年2月当時はポーランドのPGE スクラ・ベルハトッフとい

う強豪チームの監督をされていました。たまたまイタリアのカップ戦があり、私はブランさんの交渉に行ったのですが、クラブの練習風景を見たときに日本と合っていると思ったことがありました。現在ウルフドッグス名古屋に所属しているクレグ選手がブロックフォローでリバウンドを落とすときに、ブランさんがコートに入ってきて意識付けをするためにこの選手を5、6本飛ばしたのです。この、すぐ動いてボールを入れていた姿が日本に合っていると思ったのです。

これは最近の若手合宿の写真です。大学生の高橋選手、大塚選手などがいます。若手選手を2017年以降練習生といった形で呼んで、成長の進捗状況を見るということをして5年間繰り返してきました。この後ろ姿は現在東海大学ミドルの佐藤駿一郎選手です。ここで中垣内監督がボール入れをしようとしているところです。これはアジア選手権前の合宿の様子ですけども、高松工芸高校の牧選手がいます。3週間ほど練習生という形で成長の進捗度合いを見たということです。ディグ練習で石川キャプテンが指導やアドバイスをしました。奥ではセットトスの練習をしています。6対6の複合練習でも一緒にしてもらいました。

続いて、男子の総評、課題です。一つ目に、強化サイクルの推進ということでPDCAサイクルを状況に応じて回し続けることができました。二つ目は、基幹技術の構築、新技術の開発ということですが、△ということになっています。若いメンバーで発展途上のチームですので継続的に強化をしていきます。また、ブロックマシンやサーブマシン等の活用をしてきましたがメダル獲得には至らなかったもので、これからのパリに向けての課題事項であります。三つ目に、有望若手選手の戦力化ということで、大学生の早期戦力化・練習生制度を先ほどもお話をしました。結果として昨年のオリンピックで大塚選手、高橋選手を12名の登録選手の中に選手として登録することができたということになります。四つ目は、情報収集・スカウティングということで、大会では2、3名体制で推進してきました。新村さんもそうですが、いつ寝ているのかというくらい情報の収集と試合のデータ取り、選手に提供する映像編集などを試合期間中にやっていただきました。続いてPDCAがしっかりできたという図です。練習メニューを書き出し、トレーニングや練習をして、日々の練習の中で数値を出し、選手も確認をしたうえで練習をする。このようなことを繰り返して男女とも強化を図りました。そして、このことは継続してやっていくことだと考えています。男子の場合は練習メニューが全体のプログラムの中で細分化されており、より集中的に強化しなければならないことがあればその中で小さなPDCAを回すなどして強化を図っていきました。次は映像なのですが、今までやってきたことがこのラリーに

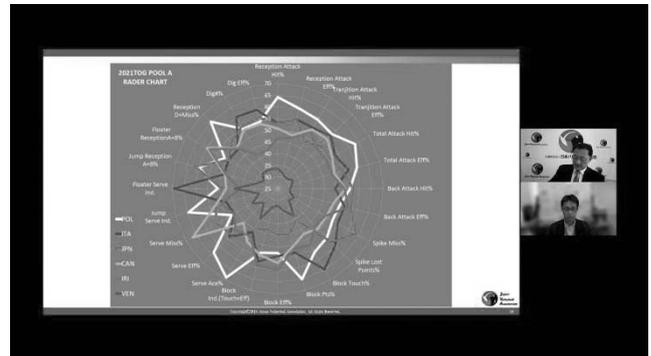
表現されました。ディグで拾い、リバウンドをもらって、石川選手のフェイクトスから、西田選手がスパイクを決めるというものです。ディグの練習は粘り強くしてきましたし、引き出しを多くするためのスパイク練習についてはブロックマシンを用いてやってきました。



次は、大会報告書の抜粋なのですが、今後の総評・課題です。1つ目は、大型でミスが少ないトップレベルのチームに対する戦い方です。これからパリオリンピックでメダルを獲得するためには必要です。さらに粘り強いディフェンスとサーブの構築、的確なスカウティングをするということが求められています。2つ目は、女子同様などころもありますが、強いサーブに対するサイドアウト力の強化であり、継続的な強化が必要になってきます。西田選手は世界的にも強いサーバーですが、各国にはそのようなサーバーが多くいるので、上を目指すためには強いサーブに対するサイドアウト力の強化が必要であると中垣内監督がレポートしております。3つ目に、有望選手早期戦力化ということで、各カテゴリーと連携して進めていくということでございます。

後ほど石丸先生の方からもあるのですが、レーダーチャートを見てもらいたいと思います。2017年のグラチャンで日本は6チーム中の最下位という結果でした。日本は赤色の線ですが、小さい円となっています。2018年の世界選手権では、残念ながら負け越して予選敗退となりました。しかし、日本のグラフは少しずつ大きくなってきました。2019年のワールドカップ、トップ6のデータです。ブロックに関して凹みが目立ちますが、他の部分では差が小さくなってきています。2021年、東京オリンピックのデータです。ブロック以外は、他の国とも勝負できるくらいの数値になっています。この中でイランとの対比で考えると、2017年当時、イランは強いと私も見ていました。そこから強化を推進していくうえで、徐々にイランチームと互角の戦いができるようになってきました。中国やオーストラリアなど大型チームもそうですが、イランと5年間で互角に戦えるようになったことは日本の大きな飛躍と言えます。これから常に勝つためにどうすればよいのかをブラン監督は構築しなければなりません。続いて東京五輪 POOL B のデータ

です。最終的にフランスが優勝しましたが、フランスは決して大きな円にはなっていません。それほどの混戦があったということです。



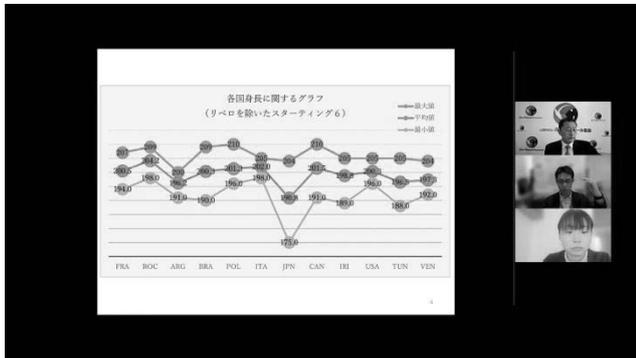
次に、一貫体制のイメージ図です。これから色々な所で見ていきたいと思えます。中学生・グラスルーツの部分を発射台にして、アンダーからシニアまでオールジャパン体制で横串を刺し、一緒になって右肩上がりに上昇していく。また、色々なカテゴリーの方と連携、関係各所と協業しながら全体を右肩上がりの強固な団体にしていきたいという図でございます。

< 石丸 出穂 氏 >

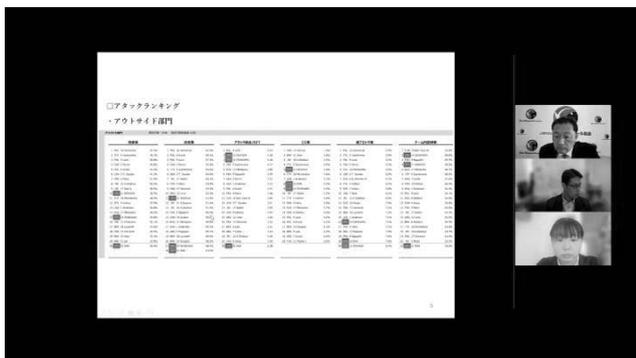
まずは各国の年齢に関するグラフです。日本は全体で見ても比較的平均値が若い世代だったということがわかります。これをスターティング7で見ると、日本の年齢の若さは非常に顕著になって参ります。ブラジルを見ると、非常に年齢が高くなっていることがわかると思えます。これは男子の日本にとっては非常に明るい情報だと思えます。このままパリまで強化し続けることも十分に可能であるということアナリストで話をしておりました。例えば、今回優勝したフランスは同じようなメンバーで5年前も戦っており、現在の日本の状況に似ていたということでした。ということは、日本もフランスと同じような道を迎えるとメダルを獲得できるチャンスがあるのではないかと考えているようです。パリに十分期待したいということでした。

これは各国の身長に関するグラフで、リベロを除いたスターティング6のものとなります。最大値・平均値・最小値ということで出されていますが、日本は最小値がセッターの関田選手で下がっています。特徴となるのが、最大値と最小値の差が16.6センチあり、最も差があるチームであったということでした。やはりブロックのことを考えるとサイズを揃えることが重要になり、長年の課題になります。そういったところが見えてくるということ。例えば関田選手が175センチでこれが190センチのセッターだったという風に過程すると、日本の平均身長は193センチを超えるということになり、最大と最小の差が大分解消されるということが考えられます。ということは、日本の男

子がやらないといけないことは、平均身長を上げていくという事よりも、最小値（セッターの身長）を上げていくことが大きな課題になるということでした。セッターがフロントに位置する S2,3,4 のブレイクが課題になってくるということです。



ここからアタックランキングのことにしてお話をさせていただきます。アウトサイドの効果率や決定率のところを見ると、ポーランドがランキングの 5 位から 3 位までを占めているような感じになっております。ミス率は日本の主力選手とあまり変わらない感じです。日本のサイドの選手 3 名は、他国と比べてもミス率は比較的低い方ですが、被ブロック率が高いということでそこに課題があったのではないかとということです。他の国を見てみると、アメリカはこの項目上位にどこも現れていないということが特徴的でした。ポーランドの上位に入っているのが、主力で出ていなかったセメニウムという 16 番の選手です。決勝トーナメントの一発目でポーランドとフランスが戦ってフルセットでフランスが勝ったのですが、このセメニウム選手をもっと早く起用していれば、ポーランドがフランスを撃破した可能性もあったのではないかとということです。



続いてミドルブロッカーのことになります。ミドルの数値はセッターの技量やレセプション、チームの戦術によるチーム内配球というところに大きく関わってくるので、一概にこの数値だけでミドルを評価することは非常に難しいと思います。チーム内配球と最終順位はあまり相関が見られないので、注意深く見ていかなくてはいいないと思いま

す。ただ、日本のミドルの選手は海外のミドルの選手と比べてもサイズの的には近づいていて遜色のない状況にはなってきたということです。一方で、アタックの決定率や効果率はまだまだ差があり、失点率も非常に高い状況にあるという風に考えているという話でした。加えてブロックのランキングを見ても、やはり上位に日本が食い込むことはすごく難しい状況にあったということでした。

続いてサーブのランキングの方に入りたいと思います。男子は現在強力なサーブでブレイクを取るというバレーボールが中心になっていますが、おそらくパリまではこの方法が続けられるのではないかと予想しておりました。日本でいうと、西田選手、石川選手がサーブポイントのところまで上位に入っていたということで良かったのではないかとということです。一方で、ミス率で西田選手は最下位に近かったということが、特に西田選手のサーブの時の S4 ブレイクが低くなってしまった大きな原因だったのではないかとということです。日本の他の選手を注目すると、高梨選手がスパイクサーブとフローターサーブを切り替えられるような選手だったということで、ミスをマネジメントする打開策になるのではないかと注目しているようです。ただ、ハイブリッドサーブと言われるサーブの助走の段階でどちらを打たれるのかわからないというようなサーブではなかったということで、理想としてはハイブリッドサーブに近づけることではないかという話でした。特に、ボールが新球に変更されたこともコメントされていました。新球が変わってからトップスピがかかりやすいボールになったという捉え方をしております。従って、ジャンプスパイクサーブのモーションからフローターサーブに変更する形が見られなくなりました。逆に、フローターサーブからトップスピをかけるジャンプスパイクサーブに切り替えるサーバーが多くなったというコメントがありました。代表選手としては、ポーランドの 20 番、ミドルのリエニエック選手が代表格ではなかったかということです。新球になったことで、同様にフローターサーブの効果が低くなってきました。以前はイランのフローターサーブが脅威でしたが、それがなくなったというようなコメントもありました。

では、偏差値によるレーダーチャートです。これは POOL A のレーダーチャートです。1 位通過のポーランドというのは、レセプションアタックとトランジションアタック、サーブ、ブロックの得点率が非常に高く、そういったところが要因で 1 位通過できたのではと見ておりました。ただ懸念点としては、レオン選手のレセプションの不安定さ、クビアク選手のコンディションが気になっていたということでした。結果的にそれで勝てなかったということもあったのかなと思います。他には、イタリアもザイツェフ選手の不調やレセプションの乱れで、サイドアウトは日本とあまり変わらないような状態でした。日本に関しては、ブロックが低くなっているということですが、ディグは数値が

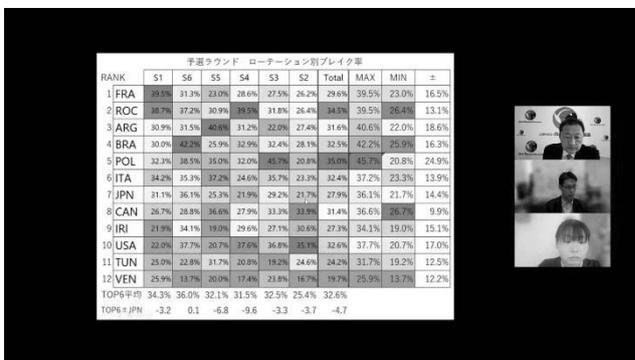
2番目に位置しており、ブロックにあたらぬ強打を簡単に落とさないディフェンスが発揮できたのではないかと思います。しかしながら、期待していたサーブは本来の力を発揮したとは言えなかったという風に考えています。

POOL Bに関して、1位通過のロシアが圧倒的なブロックとサーブの力で勝ち上がったということがデータ上でもよく分かります。アナリストが着目したアメリカは、これほど枠が大きいにも関わらず予選突破できなかったのはなぜだったのだろうかということを見ていたようです。調べてみると、20点以降の得点力が低くなっていたということでした。アメリカは20点以降のことをレッドゾーンと呼んでいるそうです。そのレッドゾーンに特化したドリルを多数用意して練習をしているそうですが、上手いかなかったということでした。数字的には、10点までのスパイク効果率が45%、ところが20点以降になると30%に落ちてしまうということ、いつもの終盤に強いアメリカが見られなかったということが、予選を勝ち抜けなかった要因ではないかと考えています。その他には、サーブが全員ジャンプスパイクサーブだったということでミス率が高く、そのためかジャンプフロッターサーブに対するレセプションが良くなかったということもありました。

では決勝の方を見ていきたいのですが、フランスは予選ラウンドと何が違ったのかということ、サーブの得点率や効果率があまり良くありません。レセプションの直接失点も非常に多くて攻撃にならないパスが多かったです。ただし、サイドアウト率が高くレセプションアタック等の決定率と効果率が高い状態だったというのが予選です。決勝になった時には、所謂レセプションでやささないということを考えています。そうしさえすれば、チャレンジシステムを上手く活用したブロックタッチでサイドアウトを取っていくというシーンが非常にアウトサイドのメンバーが上手いので、元々高いサイドアウト率をより高くして、十分に勝因に持って繋げていくことができたのではないかと思います。ロシアは予選では、ブロックやサーブで圧倒的な力を見せたのですが、決勝ラウンドではそのブロックに対してフランスにブロックタッチで対策を講じられてしまい、力を十分に発揮することができなかったのではないかと思います。その他、やはりロシアがジャンプサーブに対するレセプションが良くなか、そこで点数を重ねることができなかったのではないかと思います。



最後に、ローテーション別のことで気になることがありました。これは上からランキング図形で書かれたもので、青が高い数値、赤が低い数値ということでマッピングされたものです。ここで注目したいのが、日本のS5.S2のところだという風に言っていました。このS5とS2、全体で見てもどちらかが最低値になっているチームが、12チーム中8チームあり、非常に興味深い話でした。このS5とS2というのがどのような状況かということ、ミドルがサーブを打つ場面です。ミドルがサーブを打つということは、多くのチームのリベロがコートから不在するという状況なので、これが一因になっているのではないかと思います。やはり、日本もそれに対する課題が大きく、5年間課題に取り組んだのですが、S5とS2のブレイクを上げることができなかった、というような話がありました。唯一、2019年のネーションズリーグの時は、小野寺選手のサーブが機能して、33%という数字になりましたが、全体的にはなかなか上げきれなかったということでした。ミドルのサーブの問題と、S2はフロントにセッターがいるという状況もあるので、日本はまず、オポジットがブロックにいて両サイドからフロント攻撃が可能なS5のブレイクで、35%を目標にしていくことが、今後改善していこうということで、強化に臨んでいきたい、というようなコメントをしていました。



これがオリンピック時に日本チームが練習した会場の写真です。コミュニケーションというのがキーワードでしたが、最後石川選手が他の選手に色々話しているところです。練習後に毎日このような活動を行っていました。東京五輪

での 12 名を選ぶにあたり、ネーションズリーグに 17 名連れて行きました。そのため、5 名はオリンピックに出られなかったということです。最後の代表ユニフォーム姿として福澤選手の写真を撮りました。東京オリンピックの会場、有明アリーナでの映像です。高橋選手のサーブで相手を崩し、高橋選手のフェイクトスから石川選手のスパイクが決まりました。これが、イラン戦の前の声掛けの写真です。藤井選手が「日本チームで練習を積み重ねて来て、やっと勝負の時だからみんなで頑張ろう」ということを発信して、最後石川選手が声掛けをして円陣を組んでいます。日本チームはこのようにして、いつも声掛けをして試合に臨んでいました。藤井選手は先般胃がんであることを公表しました。これから厳しい治療が開始するので、皆さんにも回復を祈ってほしいです。続いて、イランに勝った時の映像です。最後西田選手のスパイクで勝ちました。これが写真の最後です。ブラジル戦はストレートで負けましたが、現在の発展途上のチームの力を出し切ったという顔をしています。

最後に、コロナ対策を男女ともやってきました。合宿・大会を通じて男女チームからコロナの陽性者が一人も出なかったことは評価できることであると思います。床やボールの消毒、手指消毒などを 2 年間徹底して行ってきました。

中垣内監督、中田監督は皆さんから叱咤激励をいただきながら 5 年間の活動を全うしました。私は中垣内監督のそばで見ましたが、大会前は胃が痛くて薬を飲むなどがありましたし、中田監督も体調面で大変だったと思いますが、5 年間皆さんのご支援をいただきながらしっかりやってきました。当初のメダル獲得という目標は達成できませんでしたが、次の人たちにバトンタッチをしてやっていけたら良いと思います。FIVB のコーチ委員会や中垣内さんはアジアのコーチ委員会で、バレーで携わり、我々と連携を取りながら強化を側面からサポートするというのでお二方とお話をしているので、バレーボール学会の皆さんもご支援をお願いします。

*パリ五輪までのスケジュールについては 2 日目のシンポジウムでお話しの為、割愛。

Q&A

< 新村 薫 氏 >

頂いた質問に時間内にお応えできるように、かいつまんでお話ししたいと思います。

Q:アタックの得点本数に関して、負けているチームはレセプションアタックの回数が多くなるからアタックの得点本数が多くなるのではないのでしょうか。

A:まさにその通りだと思います。ただ、韓国もレセプションアタックが多かったのですが本数は 11.7 本でありました。レセプションアタックが決まらなかったらトランジションの攻撃が多くなるので、日本に限っては、レセプションアタックに加えてラリー中のアタック得点も取っていたという風にワールドカップや東京五輪でも数字を出して見ておりました。

Q:リオ五輪の際に、A パスからのレセプションアタックの決定率が低かったのは、クイックの精度の問題でしょうか。

A:その時その時のコンビ精度で詰め切らなかったところで、リオの時には低くなっていたのではないかと思います。シャット率は低かったのですが、A パスの時にミス率が高かったのも、そういったところのコンビミスがあったのが原因だったのではないかと考えます。

トランジションの攻撃が多くなる。ラリー中もアタックの得点を多くなっていた。

Q:攻撃種類ごとの出現率と決定率についての情報が欲しいです。

・攻撃種類ごとの出現率 (トスの上がった回数)

青:ハイセット オレンジ:平行 灰色:クイック 黄色:ワンレグ 水色:バック

→平行のトスが配給としては多かったです。決定率では、勝ちセットと負けセットで見たときに非常に差があったのが、「クイック」と「バックアタック」になっています。

Q:得点が少ない韓国が 4 位という結果について、どのように考えますか。

A:オリンピックや 2021 年の大会を見て、韓国はチーム編成をしながらやっていった中で波が激しかったと思います。韓国はオリンピックではフルセット勝利で上位チームに勝ちあがっていききました。得点内訳は 1~4 セットのデータであり、5 セット目を省いているので、5 セット目に強かった韓国の得点が低くなっていることが考えられます。5 セット目に強い、勝負強いチームでした。

Q:日本はブロック決定本数が低いのに、スコアが上位なのはなぜですか。

A:ブロックタッチがどれだけできたかに関しては、日本は非常に少なく、37%しかタッチできていません。一方、上位国や身長の高い国はブロックタッチの割合が多くなっています。ここで、ブロックの決定本数とタッチの質についてのデータを見ていきます。グッドタッチとバッドタッチの割合を比べると、日本はブロックのタッチ率が少なかったのですが、グッドタッチの割合が多かったです。一方のブロックタッチ率が多い国は、決定本数も多いですが、バ

ッドタッチの割合も多く、ブロックを利用されての失点が多かったことが分かります。これがテクニカルレポートのからくりになります。

< 矢島 久徳 氏 >

Q:一貫指導とは、各カテゴリの代表クラスの人的交流が中心になっているような印象をもちます。アンダーカテゴリといっても広く、私どもの現場小中高の指導現場では、トップからの最新の連携に関する情報はほとんどなく、昔からの指導法や戦術論が多いです。今後の一貫指導はどのような発展の方向性があるのでしょうか？

A:ブラン監督と真鍋監督の新体制になる中で、アンダーカテゴリの強化と一貫指導が重要テーマとっております。前回も代表監督とミーティングをしましたが、やはりそのような連携が大事だと考えております。アンダーカテゴリは詰めすぎず、余力を残しつつ次に渡していくということが大切な部分だと個人的には考えております。皆様には、ぶつ切りではないかという考えを外していただきたいです。現在、中学・高校・大学・Vのチームを含め、各カテゴリと情報の共有を含めて連携をしているので、それが形となって表れるように活動していきたいと思っております。男子の例で言うと、高橋藍選手を高校卒業後すぐに呼んだり、牧選手を練習生として呼んだり、常に有望選手の共有をしながら継続してやっているのが現状です。これが形になるように勧めていきます。

海外に送る支援というところは、まだ構築されていません。競技の様子を見ながら、費用的な支援制度があって海外に送り出すことを業界主導でできれば理想的ではありますが、現在はまだできていないことが残念であります。大学は個別で海外に送り出しているところもありますので、そのようなところとタイアップしながら、進めていければと考えています。

Q:「テクニカルレポート」が、広く、公開されていないのは何故でしょうか？見るか見ないかは個人の自由ですが、希望があれば、日本のバレーボール関係者は、情報共有されるべきものだと思います。

A:これは隠すものではないと思っているので、学術的に先生方に見ていただき、教材として議論の題材にさせていただくなどすることでバレーボールの発展に繋がると考えています。しかし、作成には非常に労力を要するものとなりますので、皆さんへの提供については、費用の面などを考えたうえで、お見せできればと思います。

色々な大会が終わり、数値が出て、良かったこと・悪かったことが分かりました。両監督ともどのようなバレーをしていきたいかという方針があり、それを貫き通してやってきましたが、最終的にそれが成績として出たかということとは〇×で判断されてしまいます。自分のイメージを持っ

た中で、選手の能力を見て戦術を作っていくという流れが大切であると考えています。私が監督の時には1年目の入れ替え戦から速いバレーというものを思い切って変えて、2年目は優勝ということで成功したという風に見えました。しかし、実際はそうではなくて、それぞれのチームや選手に合った戦術というのがありますので、今回中田監督・中垣内監督のやってきたことに異論は全くありません。これからブラン監督、真鍋監督とどのようなことをやっていくかという方針を話し合っていきますが、皆さんには意見を出していただきながら、支援・応援していただきたいです。

